

第 65 回海外日系人協会：基調講演

ご臨席の皆さまこんにちは、またオンラインにてご参加の皆さまにもご挨拶申し上げます。

総合テーマを「混迷と不安が深まる世界とニッケイ社会～新たなつながりを求めて」と掲げた「第 65 回海外日系人大会」において、このような機会をいただきましたことに対し、阿部守一会長、及び田中克之理事長に心より感謝申し上げます。

この総合テーマに沿って、私は、「混迷と不安が深まる国際情勢の中で、ニッケイ社会と日本に求められるもの」を副題とし、お話しさせていただきたく存じます。

私は、石川レナトと申します。1938 年にブラジル・サンパウロ州内陸部のパラグアスー・パウリスタ市で生まれました。日系二世でございます。

私の父、石川ケンゾウは 1928 年に大阪から、母、ハルエは、1931 年に福岡から、それぞれの家族とともにブラジルへ渡りました。

多くの日本人移住者と同様に、私の両親も「子どもの教育を最優先に」という考えでした。姉と私が片田舎のイビウナ市で初等教育を終えると、両親はさらなる学びの機会を与えるため、それまで築いたすべてを投げうって 1954 年に州都サンパウロへ移り住みました。

ちなみにブラジルへ渡った他国の移住者は、まず心のよりどころとして教会を建てましたが、日本人移住者は次世代の育成のため、学校を建てることを優先したと言われています。

私はマッケンジー大学経済学部を卒業後ジェツリオ・ヴァルガス財団で経営学の修士課程を修了しました。その後、入社したエリクソン社の支援でアメリカの金融専門課程を修了しました。

私は、教員だった父の収入だけでは家計が苦しかったため、幼少期から登校前や帰宅後に野菜を育てるなどして生計を支えていました。

幼い頃から休むことなく働き続け、多くの子どもたちが過ごすような「子どもらしい」時代は私にはありませんでした。7 歳の時には、すでに家族と共に農作業で汗を流し、学校も夜間に通いました。

私はこれまで様々な職場を経験してきましたが、特にエリクソン社と NEC ブラジル社でキャリアを築きました。

私は 1970 年にスウェーデン系企業エリクソンに入社し、コントローラーとして働き始めました。

1975 年、37 歳の時に、グループの取締役会からブラジル子会社の財務責任者に選ばれました。当時、その子会社は LM エリクソングループ全体の 25%を占めていました。

社長と財務責任者は常にスウェーデン人駐在員が務めるという従来の慣習を打ち破り、スウェーデン人以外で初めてこの役職に就くという栄誉に浴しました。

1984 年、日本の NEC 本社からの度重なる要請を受けて、NEC ブラジルの財務担当取締役役に就任しました。その当時、ブラジル子会社は株主間で深刻な対立があり、私はまさにこの状況を打開するために雇われたのですが、解決に至るまでには約 1 年を要しました。

当時の通信事情はまだアナログで、電話回線が大幅に不足していましたが、わずか 10 年余りでブラジルは国内外への自動ダイヤル通話が可能な、世界でも最先端の電話網を有する国へと成長しました。

そして 1992 年、NEC ブラジル社はリオデジャネイロ市にて先駆けて携帯電話システムを導入し、リオデジャネイロとブラジリアを結ぶ初のモバイル通話を成功させたのです。

1999 年、私は日系人として初めて NEC ブラジル社長に選出されました。任期中に私は多様な利益を調和させるべく役員やスタッフ、取引先等との対話を重視し、大きな改革を断行するため、共に忍耐強く取り組みました。効率性の向上、市場シェアの拡大、収益を増加させるために全力を注ぎました。

NEC 社の規定により 65 歳で定年を迎えました。仕事一筋だった長年の生活から離れ、イタリアのトスカーナでサバティカル休暇を取る計画を立て、イタリア語の勉強

や家を借りる準備まで進めていました。しかし、自身の事業に投資することを決めたためその計画は一変しました。

さらに、住宅分譲地建設事業の共同経営者の誘いを受けました。私は、この新たな挑戦に魅力を感じ、サバティカル休暇を延期することを決断したのです。こうして、私の人生の新たな章が始まったのです。単なる投資家だった私が、不動産業界で設計から建設、そして販売までを一手に担う企業を立ち上げるに至ったのです。

こうして CNL は誕生しました。

「納期厳守」と「高品質」をモットーに、マンションやオフィスビルの建設を手掛けており、現在は直接雇用者が 60 名、間接雇用者は 300 名を超える企業に成長しました。

それ以外に、私は現在、コーヒーの生産と牧畜産農場を所有しております。元々、ここは NEC 時代に休養するための隠れ家的な場所でしたが、少しずつ土地を買い足し、今では 1,300 ヘクタールにまで広がりました。

現在、ここで約 150 万本のアラビカ種のコーヒーを栽培しています。最新の農業技術を導入し、植え付けから収穫に至るまで全工程を完全に機械化しています。

ここで収穫される年間平均約 500 トンのコーヒーは、「レインフォレスト・アライアンス」の厳しい品質認証をクリアした上でヨーロッパや日本へ輸出しています。

この農場では約 50 名を直接雇用し、地域社会の発展と活性化にも貢献しています。

ここで、皆様に CNL とファゼンダ・アリアンサの一部をご紹介します短い動画をご覧くださいと思います。

なお、動画にはサンタクルス日本病院や文協—ブラジル日本文化福祉協会の紹介も含まれております。

1908 年に初めての日本人移住者を乗せた笠戸丸がブラジルに到着して以来ブラジルの日系人は 6 世代へと進んでいます。この移住の歴史は一貫して勇気と勤勉、そして困難の克服の物語です。

初期の移住者たちは、言葉、食文化、熱帯気候とそれに伴う風土病、そして極めて非人道的な労働条件など、数えきれないほどの困難に直面しました。

第二次世界大戦の勃発により状況はさらに悪化しました。ブラジルの日本人移住者は厳しい制限と弾圧に遭いました。日本語学校の強制閉鎖、邦字紙の発行禁止、日系団体の解散、さらには母国語を話すことさえ許されませんでした。

しかし、日本人移住者はこれら苦難に屈することはありませんでした。彼らは粘り強く生き抜き、戦後にはコミュニティーを再建し、このブラジルの地に順応していきました。そして今、日系社会は、ブラジル社会において最も融合し、深く尊敬されるコミュニティーの一つとして認められています。ブラジルもまた、この文化を愛情と敬意をもって受け入れることを学んでくれたのです。

ブラジルにはおよそ 270 万人の日系人が暮らしており、これはブラジル総人口の約 1.3%に相当します。そして、日系人による国の GDP の貢献度はこの数字をはるかに上回る、非常に大きなものです。

ブラジル国内には約 420 の日系団体が存在します。ブラジルと日本の関係は調和のとれた共生のモデルとなっており、文化の違いこそがかえって両国を結ぶ架け橋となり、互いを豊かにしています。

一方で世界はデリケートな時期にあります。本年 2025 年は第二次世界大戦の終結から 80 年です。このことは、戦争の恐怖とかけがえのない平和の価値について私たちが改めて考えるべき機会を与えてくれます。

広島と長崎に投下された原子爆弾は何世代にもわたって心に深い傷を残しました。この痛ましい出来事は破壊がもたらす悲劇的な結末と、私たちが手を取り合い、協力し合うことこそが平和な未来を築く上で不可欠であることを今も語り続けています。

世界は新たな形の紛争に直面しています。戦争、強制的な移動、偽情報の拡散、そして特にヨーロッパやアメリカで見られる排他的発言の増長です。

世界中の移住者はかつて私たちの祖先がそうであったように、不信の目にさらされています。現地の法律や習慣を厳守することの必要性は言うまでもありませんが、SNS 上で偏見やフェイクニュースによって、多くの移住者が不当な差別の被害に遭っているのも事実です。

世界各地に点在する日系人は日本の伝統を誇りにしながらも、受け入れてくれた国々の国民として生きています。私たちは、国境を越えて異なる文化の中で自らのアイデンティティを築くことの難しさを誰よりもよく知っています。

だからこそ、この時代に私たちが果たすべき重要な使命があると考えています。それは、対話を促進し、多様性を尊重し、新しい繋がりのため絆を新たにすることです。

本年の全国知事会において提案された日本人と外国人が調和して共に暮らせる環境、すなわち多様性共生社会の実現の必要性についての提言を私も支持したいと思います。

1955年に設立されたブラジル日本文化福祉協会、文協は、会長と14名の理事によって運営されています。また、東西南北ブラジル全土に28名の地方理事も配置されております。

私は2019年に文協会長に就任し、文協が企業視点で自立した組織へと変革し、社会から深く尊敬される存在となることを使命と掲げました。その実現のため私は二つの重要な目標を設定しました。一つは「関係性の強化」、もう一つは「若者が主役として活躍できる環境づくり」です。

私はブラジルおよび中南米の日系人コミュニティーのイベントに出席するため最も多く各地を回った会長だったと自負しています。また、日本では天皇陛下の即位礼正殿の儀にブラジル代表の一人として参列することもできました。

さらに第60回海外日系人大会では天皇皇后両陛下ご臨席のもと、海外日系人を代表して謝辞を述べるという、貴重な経験もさせていただきました。

文協は現在、日系人社会のみならず、日本、そしてブラジル社会からも高く評価されていると断言できます。その証拠に、文協はブラジルの大統領より最高勲位の一つであるリオ・ブランコ国家勲章グラン・マエストロ級を授与されました。

私たちはラテンアメリカの日系社会イベントにも積極的に参加してきました。例えば、昨年パラグアイで開催された汎アメリカン日系人大会や、ペルー日系人協会が企画した過去3回の国際日系対話です。

そして今年は文協が第4回国際日系人対話を主催しました。ペルー、ボリビア、メキシコ、チリ、パラグアイ、アルゼンチン、アメリカ合衆国の日系団体代表がブラジルに一堂に会したほか、日本政府を代表して山田彰大使が特別参加されました。

来年2026年には、汎アメリカン日系人大会もブラジルで開催される予定です。ラテンアメリカ諸国に加え、アメリカ合衆国やカナダからも参加が見込まれています。

他国の日系人が集まるイベントを主催することは、我々の社会間の関係をさらに深めるための方法を積極的に模索することになる、このように考えています。

かかるイベントで若い世代の交流をも促進するため、海外日系人協会からも若者の参加を奨励していただくことは有益な方法の一つだと考えられます。

関係性を強化することの重要性に加え、私は日系人の若者こそがこの混迷と不安が増す世界で新たなつながりを見出す鍵だと確信しております。

特にZ世代は大きなデジタルプレッシャーの中で生きていますが、環境意識、創造性、社会参加、そして批判的思考力に優れています。彼らは経済的な不安定さや情報過多といった絶え間なく変化する世界に直面していますが、同時に、世の中を変えるための勇気、価値観、そして意欲も持ち合わせていると言えるでしょう。

私は彼らにこそ未来への希望を感じています。よりバランスの取れた世界へと導くのは若者たちの役割であり、使命でもあるのです。だからこそ、私は彼らの主体性を引き出すことを最優先事項としてきました。

これは皮肉にもコロナウィルスのパンデミックが功を奏しました。若者たちはデジタルプラットフォームを駆使してオンラインイベントを企画、実行し成功を収めました。この行動は文協理事会などの会議のオンライン化にもつながり、ブラジルの広大な国土におけるコミュニケーションを格段に円滑にしました。

また文協の若者たちは自らブラジル日系社会の間で今受け継がれている価値観を確認するための「ジェネレーション・プロジェクト」を立ち上げました。2年間にわたり500人以上の様々な年齢層の日系人を対象にワークショップを行い、最終的には以下の8つの価値観にまとめました。

8つの価値観

- 責任
- 学び
- 誠実
- 敬意
- 忍耐
- 親切
- 感謝
- 共同

これらの価値観は、私たちが日々実践しているものであり、私たちの活動を通じて次の世代、そして社会全体へと伝えていくべく努めています。

私は常に新たなリーダー、特に若者を育成することを重視しています。彼らが情熱と新鮮なビジョンと発想をもってこの活動を引き継いでいけるようにするためです。

私は長い人生の中で直接的に若者たちにチャンスを与え、彼らを勇気づけることに力を注いできました。

ここで明確にしておきたいことがあります。私が「若者」に言及する際には日系人に限定するものではないということです。日本文化を愛するすべての人々に積極的に日系社会に参加してほしいといった、包摂的な気持ちを込めています。

既にブラジルでは祭りなどの日系イベントに集う半数以上が日本にルーツのない人々です。それでも、彼らは日本文化を敬い、慕ってくれているのです。日系人ではないこうした愛好家に門戸を開かなければ、日系社会の長く繁栄ある未来を築くことは難しいでしょう。

私が個人的に抱いているこの信念は、文協の若者たちが推進している二つの活動によってさらに強固なものとなりました。一つは、若いリーダーたちを鼓舞することを目的とした「文協統合フォーラム(FIB)」です。もう一つは、「日系団体青年部指導

者合同会議(REVI)」で、これはブラジル全土の日系団体の刷新を志す若者たちを結びつけることを目的とした活動です。

日系社会の若者について語るとき、ここ日本に住む日系人の若者たちの存在を忘れてはなりません。現在、在日ブラジル人は約 21 万人で今では大半はブラジルに帰る意思がありません。

2022 年以降、私が訪日する際は必ず若い人たちを同伴しています。それは在日ブラジル人コミュニティをもっと理解して欲しいからです。

ブラジルと日本をつなぐ堅固な橋を建設しているのです。

日本での出会いをきっかけに、昨年私たちは群馬県在住の若者たちと共に「コネクション・文協・ジャパン」を開催し反響を呼びました。そして今月 20 日には、2 回目となる同プロジェクトを、今度は名古屋で開催予定です。

ブラジルと日本の若者によるこのプロジェクトは日本の社会が外国人政策について議論を交わしているこの時期に行われます。

この問題は大変繊細で論争を呼ぶテーマではありますが、だからこそ外国人コミュニティの声が真に届くような形で進められることが彼ら外国人を取り巻く実態を知る上で何より大切だと考えます。

私はそうすることが、偏見や感情的な議論のみに基づいた結論を避けるための最善の方法だと信じています。

大多数の人々は、勤勉で真面目に働き、日本の規律や慣習を尊重しつつ地域経済に貢献しようと努力しており、次世代のための日本社会の一員として正当に認められ、活躍できることを目指しています。

これは私たちの祖先がかつて子供たちのためにより良い生活を夢見て、涙ながらに日本を後にしたのと同じ現象です。

そして本日ここに集まっているのは、初期の移住者の子どもたち、孫、ひ孫たちです。私たちは、先祖よりも恵まれた環境のもとで再び日本に戻り、地域社会をいかに強化できるか、また日本の魅力を世界にどのように発信していくかを話し合うために集まっています。

日本政府や地方自治体は多様性に必要な環境整備を行っています。しかし簡単なことではないと承知していますし、各人がそれぞれの立場で努力する必要もあります。

現在、外国人に関する議論が過熱しているまさに今こそ、日本政府に理解していただきたいのです。私たち日系人は、日本の未来にとって重要な存在であるということ。なぜなら、私たちは日本人の外見的特徴を受け継いでいるだけではなく、日本にルーツを持つ者としての誇りを胸に刻んでいるからです。

大げさに聞こえるかもしれませんが、私は日本に来るたびに故郷に帰ってきたような気持ちになりますし、ここにいる皆さんも同じような気持ちだと思います。日系人の中にあるこの思いは実に特別なものであり、外国人問題について議論される際には是非この付加価値について深く考慮していただきたいと願います。

また、この機会をお借りし、一つお願い申し上げたいことがございます。それは、日本で学び、働き、この社会に平和的に貢献したいという誠実な気持ちをもって来日する日系の若者たちに、どうかより一層のご配慮とご支援をお寄せいただきたい、ということでございます。

これらの若者は日本のルーツを受け継ぎ、文化への憧れを抱き、伝統を尊び、そして架け橋を築こうとする志を持っております。多くは、日本国民の皆様と同じように、平等な条件と機会を与えられ、人間としての尊厳をもって成長していくことを願っているのです。

私自身、ビジネスマンとしてこれまでブラジルと日本を結ぶ架け橋となる務めを果たしてきたキャリアの中で、日系人は技術的にも人間的にも、リーダー的立場や大きな責任を伴う役職に就く資質を持ち合わせていることを実感しておりました。ここで申し上げる「人間的に」というのは、私たち日系人が課題に直面したときに対話を重んじて、創造的な解決策を見だし、柔軟に適応し、そして日々の出来事に対しても共感と協調の心をもって対応できる力のことです。私はこれらが、世界中のすべての日系人に共通する強みだと確信しています。

2024 年 5 月、当時の日本の総理大臣、岸田文雄首相をブラジルでお迎えする栄誉に浴しました。スピーチの中で総理は、日本を体験してもらうために今後 3 年間で 1,000 人の日系人の若者を日本に招くと発表されました。この崇高な取り組みは若者に大きな刺激を与えるとともに、両国の絆をさらに強めるものとして、私たちの記憶と期待の中に今も生き続けております。

日本政府の招へいにより訪日した若者たちは、多くを学び、両国の関係強化に対する意欲を高めてブラジルに帰国します。外務省や JICA の招聘・研修プログラムはその素晴らしい一例です。より多くの若者がこれらのプログラムに参加できるよう日系人関係予算の増額をご検討いただければ幸いです。

人的交流に関して、本日の機会に若い世代の日系人が両親や祖父母等の出身県に特別な思いを有していることを申し上げたいと思います。故に県費研修生・留学生等の制度によって学ぶ機会を与えることは重要だと感じております。また、更なる人的交流の活発化のために4世ビザ制度の大幅改正、ワーキング・ホリデー制度の導入も必要であることを表明させていただきます。

最後に日系団体における後継者育成の重要性について一言申し上げたいと存じます。組織の刷新は不可欠です。若い世代が地域の団体に積極的に関わり、年長者から学びながら、自らの道を切り開くよう促す必要があります。

続いて、ブラジルで行われているイベントの一部を映像でご紹介したいと思います。

私は今年の12月で87歳になります。

私は、とても運の良い人間だと思っています。神様のおかげで健康に恵まれ、働くことができ、家族と共に暮らし、良い友情を育むことができています。

この数十年の間世界で起きた大きな変革を目の当たりにしてきました。人類が月に到達したことやベルリンの壁の崩壊を目にしました。そしてアメリカの同時多発テロや2011年3月の東日本大震災などの惨劇を身近に感じました。

通信分野における革命も間近で見えてきました。インターネットの登場によって、かつては想像もできなかった速度で音声や映像、データがやり取りされるようになりノートパソコンや携帯電話が普及し、まるで世界が手のひらにあるかのような時代になりました。

しかしながらデジタルの進歩による革新的な時代にあっても、今なお世界の様々な地域で栄養失調に苦しみ、飢餓で命を落とす子どもたちがいることは痛ましい現実です。その多くは、戦争という人間の貪欲さが直接的な原因となっています。

このようなイベントに参加することによって築かれる新たなつながりこそが、私たちが現代の諸課題を克服するための重要な鍵となると考えます。

この大会が過去を尊重し、未来を構想して世界の平和に対する私たちのコミットメントを再確認する機会となることを信じております。

先人たちの歩みがこれからも我々を導き、勇気づけてくれますようお願いしてやみません。

そして、新しい世代の日系人たちが自らをより公正で思いやりにあふれた、真に繋がっている世界のプレーヤーとして自覚することを期待しています。

ご臨席の皆様、そしてオンラインでご視聴の皆様に改めてお礼を申し上げます。

最後に、若者の皆さんに一つお願いがあります。主体的に行動し、リーダーシップを発揮して、戦争の無いより良い世界を築いてください。そして、未来の世代のためにこの地球を守ってください。

どうもありがとうございました！